

# 外国人留学生の日本社会への適応パターンと 日本語教育の課題

林 伸 一

## 要旨

外国人留学生の増加とともに日本社会への不適応現象が問題となり、受け入れの大学が苦慮している例がみられる。本稿では、稲村（1980）の『日本人の海外不適応』を手掛かりに、外国人留学生の日本への不適応現象に関して適用できないかという観点で考察した。稲村（1980）は精神医学の立場から不適応問題を論じているが、本稿では大学のスタッフとしての立場から同氏の適応の段階論について外国人留学生の場合にどの程度あてはまるかを考え、あわせて日本語教育の課題を検討した。

## キーワード

入国期、不満期、静観期、適応期、望郷期

## 1. 外国人留学生の日本への適応パターン

稲村（1980）は、日本人の海外不適応の事例を検討し、異文化不適応の5段階論を示している。それは、移住期、不満期、諦観期、適応期、望郷期という区分である。

林（1990）は、稲村（1980）の異文化適応の5段階論を首都圏で生活する就学生の場合に当てはめて検討している。その後、林は適応の5段階論を第1段階目の「移住期」を「入国期」、第3段階目の「諦観期」を「静観期」と呼び変えて「入国期→不満期→静観期→適応期→望郷期」として、異文化適応の変化を示している。本稿では、大学における留学生の場合に異文化適応のパターンが当てはまるか否かを検討する。以下に、林の移住期を入国期、諦観期を静観期と言い換える区分法を採用して、異文化適応の段階論を概観しながら検討する。

まず、最初に留学生の日本への不適応現象を大ざっぱにとらえるのではなく日本への適応と滞在期間の関係を検討する必要があるだろう。留学生が日本に到着してから、日本社会へ適応して行くまでの間には、個人差や出身文化によって差はあるにしても、ほぼ同じような段階をたどるという傾向があると思われる。

- 1) 入国期（留学生は移住するとは限らないので、入国期とした）
- 2) 不満期（何に対しても誰に対しても不満を感じる時期）
- 3) 静観期（諦観という程度がはなはだしいので、静観期とした）
- 4) 適応期（無理なく日本の生活に適応している状態にある時期）
- 5) 望郷期（どうしても帰国したいと思いつてもたつてもいられない時期）

### 1-1 入国期

留学生にとって最初に問題となるのは、入国期である。文字通り日本へ入国したばかりの時期で、日本に対して期待と不安を持ち、見るもの聞くものがすべて新鮮に感じられ、自国との急激な環境変化にできるだけ早く適応しようと無我夢中になっている。目にするものが物珍しいだけでなく、次々にしなければならぬことがたくさんある。例えば次のようなことをしなければならない。

1. 入学予定の学校での諸手続き(入学金・授業料納入, 書類提出等)
2. アパート探し・契約(「外国人お断り」のところが多いので困難)
3. 本国からの荷物の整理(別送荷物の場合はその受け取り)
4. 買い物(衣食住に必要な条件を整え, 教材・教具などを購入する)
5. 対人関係(在日身元保証人や先輩・知人への挨拶・訪問)
6. 外国人登録・国民健康保険(市役所, 区役所などで手続, 住所が必要)
7. 銀行口座開設(本国からの送金受取用に本人名義の預金口座を開設する)
8. 携帯電話契約(外国人登録の仮証明, 銀行口座などが必要)
9. アルバイト探し・面接(日本語ができないと条件は不利になる)

以上のようなこと以外にもいろいろ細かいことを一どきにしなければならないので非常に忙しい。また、気候、風俗習慣、言語生活の違いなどに慣れるのが大変である。例えば、常夏の国から真冬の日本へ来てしまう学生もいる。

入国期はこのような多忙さのために、とにかく無我夢中で、緊張と興奮が続く状態にある。おおかたの留学生は好奇心も強く、見るもの聞くものすべてを珍しく感じるが、周りの人々に対して配慮するだけのゆとりがない。

また、本人が不適應になっているゆとりもない。稲村(1980)も指摘しているように、この時期の異文化に対する受容力と適応力は著しく、目をみはるものがある。学習者自身が、後で振り返ってみて「よくまああれだけのことがやれたなあ」と思うほど張り切っている。

「まず異文化の人々と表面的に接触する初期の段階では高揚した楽観的な気分が支配的になりやすい」との指摘もある(岩男・萩原1988:40)

とにかく、入国期の留学生は新しい環境に早く慣れようとする。特に、アジア系の留学生のバイタリティーあふれる生活力には舌を巻くものがある。来日した次の週からアルバイト先を探し出してくる留学生が少なくない。昼間は大学に通い、夜は居酒屋でアルバイトをして月十数万円以上稼ぎ、学費と生活費を捻出している場合もある。

この時期は、同時に入学時期にあたり、日本語能力が不十分な状態で入国してきた留学生にとっては、日本語による諸手続きをこなすのに精一杯である。諸手続きが一段落したあたりから次の[不満期]に入る学生もいるので、あらかじめ不適應による諸問題を想定して入学時に学習と生活に関するオリエンテーションをしっかりと実施しておくことが望ましい。留学生の母語で書かれた『外国人のための生活ガイドブック』や『学生便覧』等を配布したい。できるだけ早期に外国人学生のためのチューターを選任し、こまごまとした生活と学習面のサポート態勢を整えるようにしたい。チューターは世話好きで、留学経験のある学生や異文化交流に関心のある学生が望ましい。

### 1-2 不満期

不満期は、前述の入国期に続いて現れ、程度差や個人差はあるものの誰にも必ず訪れる。入国期の混乱と緊張が一応収まり、日本で生活していくための衣食住の条件は何とか整い、

学校やアルバイト先の対人関係にもやっと一通り慣れてきて、気分的にほっとした頃から始まる。

とにかく最初の入国期に一番の問題が集中すると考えられがちであるが、実は、この不満期が精神的に最も問題で、不適応の発生しやすい時期である。今まで無我夢中でよくわからなかった状態から、徐々に日本に関する欠点が見え始め、不合理や不便さ、不自由さが次々と気になり始める。特に来日前に日本を理想化して、日本留学に対する期待が強い留学生ほど、日本に関する欠点がよりクローズアップされて見えてくる。

「えっ、こんなはずじゃなかった」という思いに始まり、何でも本国と日本とを比較してみるようになる。例えば、本国に比べ日本は物価が高い、日本人は欧米からの留学生には親切なのにアジアの留学生に対しては不親切で差別的だなど「一事が万事、不満でたまらない。いらいらやあせり、易怒性などがでてむしょうに腹立たしい」(稲村1980:164)。易怒性とは、大した理由もなく、突然怒り出すなど感情をコントロールする力が低下している状態を言う。

毎日、紋切り型の「おはよう」「こんにちは」だけの挨拶ですませ、なかなか個人的なやりとりを含むコミュニケーションに発展しないといった日本人学生との交友関係に物足りなさや不満を感じる中国人留学生や韓国人留学生も多い。

日本での「社会生活に深く携わるようになると文化の違いによる障害が表面化し始め、緊張や混乱、疎外感が強まる」(岩男・萩原1988:40)

森本(1978)は、スウェーデンでの体験で「日本の社会はずいぶん騒がしい社会」と感じ、「人々の関心の、意識の、心情の落差から生み出される“異邦人”感覚」について述べている。来日した多くの外国人が、この“異邦人”感覚を感じている。

稲村(1980)によると、不満期には「心理面だけでなく、身体にもよく障害を起こす。原因不明の下痢や発熱をすると、アレルギーを起こす、食欲がなくなる、眠れない、むしょうに疲れる、ひどい風邪を引いてなかなか治らないなど、さまざまである」と身体症状に不具合が発生するとしている。

一般的に言えば、人間の心理面(こころ)と身体面(からだ)は密接不可分の関係にあり、特に初めての外国生活では、「両面の障害や矛盾が並行して表れやすく、心身ともにみじめな状態に陥ることが多い。身体を壊すからよけい心理的に参るし、心理的に参ると身体も障害を起こしやすくなる」(稲村1980:164)という具合に、悪循環を招く結果となる。

問題とされる不適応現象は、この不満期に最も現れやすく、自殺や精神障害をはじめ、諸問題が発生するとされている。この不満期の始まりは、たいていの場合、入国後数週目頃からであるが「その長さには個人差があり、あっという間にわけなくこの時期を終える人から、最後までこの時期がだらだらと続いている人まである。また、後の時期に至っていても、何かのきっかけがあると逆戻りしてこの時期となり、再び長く苦しむような場合もある」(稲村1980:164)。

不適応の予防のためにとるべき対策としては、留学生担当の教員あるいはカウンセラーが、各個人の相談にのり、各自の不満をそのまま放置しておかないようにする必要がある。留学生の不満が大学のシステムや運営方法に向けられている場合には、改善すべき点は改善し、不可能の場合には何故不可能なのか説明する。特に大学のスタッフとしては、留学生の日本語能力が不十分なために訴えが稚拙に聞こえたとしても一個人の主張・訴えを尊重する態度で接するようにしたい。

また、日本語能力が不十分な状態で入国してきた留学生にとっては、三ヶ月ぐらい経過

した時期から身の回りの様々な事柄に不満を述べるようになる。日本語を教える側は、そういった不満を権威や建前から抑えつけるのではなく、むしろ不平・不満を述べる日本語能力が身についてきた表れとして歓迎すべきであろう。もっとも留学生の中には、本当の不満として感じていなくても一応不満の形で大学側にぶつけてみて反応を見るという場合もあるので、本当の不満が否か教員や職員の側が見極める必要も出てくる。

また、この時期は「カルチャア・ショック(cultural shock)」の時期でもある。たとえ日本語が話せても、初めて日本へ来た外国人が、非常に戸惑うのは、文化という複雑なシステムがあらゆる側面に現れて、拒絶反応を示すからであるといわれる。たとえば個人宅に招待されて、ご馳走になった場合など、その場で礼を述べるのは当然としても、日本ではその後に出会った場合に、再度礼を言うことが隠されたルール(hidden rule)として存在する。それに従わないと「招待したのに礼も言わない奴」とされ、二度と招待されないなど大いに戸惑うことがある。

木村(2007)は、接客場面を想定したロールプレイによる談話分析を行ない、注文の有無をめぐるトラブルにどう対処するかを調べている。日本人は、とにかくまず店員が客に謝り、「紛争回避型」で対処するのに対して、中国人と韓国人の留学生は、客の側からは言い訳に聞こえるような「弁明」で対処する傾向が明らかにされた。「お客様は神様」といったような扱いで、理不尽な客のクレームにも、「弁明」せずに対処しなければならないという「見えざるルール」が存在するのが、日本文化である。アルバイトを通して、こうしたカルチャア・ショックに遭遇する留学生も少なくない。ある焼肉店チェーン店では、「何が正しいかではなく、誰が正しいか」と問題設定し、「正しいのは常にお客様」という従業員教育をしている。アルバイト先で客

のクレームにも日本事情に精通していない留学生が対応しなければならない事態が発生する。

特に、留学というはっきりした目的を持って入国した場合、「この拒絶反応は大きなショックである」(中根1972:13) また、この「カルチャア・ショックというものは、快感よりもむしろ不快感をとまなうものである。それは自分たちのやり方がうまく機能しなくなるからである」(中根1972:16)。

日本の進んだ科学技術や文明・文化にあこがれて、来日した人にとっても、日本の文明や文化の発達に、皮肉にも「文明とは抑圧の機構、文化とは抑圧の体系」(森本, 1978)に見えてくるのが、不満期である。そもそも異文化体験とは、異なる抑圧の体系(ルール)の中に身をゆだねることである。車の通行が一切ないにもかかわらず、じっと辛抱強く信号が変わるのを待っている日本の厳格な交通規則順守システムの中にあって、ストレスを感じている留学生もいる。

### 1-3 静観期(諦観期)

不満期を終えると次は静観期がやってくる。不満に対する諦めのつく時期で、日本というところはこんなところなんだとか、日本人というものはこの程度のもなんだとか、この程度で仕方がないだろうと諦め、あるがままの日本の素顔を直視し、現状をそのまま受け入れ、静観するようになる。留学生なりに一種の諦めと悟りの境地に至るというわけである。滞日期間の長い留学生は、何らかの不満期を経て、自文化の価値観と日本文化の価値観の違いに、どこかで折り合いをつけている静観期に至っている場合がある。

ある中国人男子学生は、来日一ヵ月後に始めたアルバイトで、先輩から注意されて「お前、バカか」とまで言われて不満を感じた時期もあったが、来日二年半経った現時点で振り返ってみると、「とてもいい経験だった」



と述べており、静観期に至っている。この時期は、前項のカルチャ・ショックを楽しむぐらいのゆとりがでてくる。

来日一年三ヶ月の中国人女子学生も自分の留学生生活を振り返って「入国期は新鮮なことばかりで、不満を感じるゆとりがありません。だんだん食事が合わない、バイト先の人ที่ไม่親切などの不満があったが、今はもう慣れた」と静観期に入っているようである。

日本語の学習が進むにつれて、不満に思っていたのは言葉の行き違いからだけでなく、自分にも不十分な点があると認識する余裕が出てくる。それと並行して日本事情教育が行なわれると、日本社会のシステムとしては、こうなのだろうか、文化の構造が違うのだからこう感じるのだろうか、異文化理解が深まることにより、自分なりに納得して気持ちが落ち着くこともある。

ゴミの分別などしない国から来た留学生も、資源の有効利用のしくみがわかるとわずらわしいと思いつつも、分別に協力するようになる。日本語の学習だけでは、留学生の日本への不適応現象を解消する決め手には限らない。日本語の学習と同等に日本事情教育も重要であることを教える側がはっきり認識しておく必要がある。大学の共通教育と専門教育のカリキュラム上でも日本事情の学習を組み入れることが望ましい。日本事情は、生け花や書道、茶道など日本の伝統文化を教えることだと決め付けている人もいるが、本来は日本社会への適応教育としての役割が期待されているという面が大きい。その観点からは、日本事情を初級・中級・上級と日本語学習のように区分するのではなく、入国初期の段階、不満期の段階、静観期の段階と入国からの隔たりと適応の段階で区分するのが望ましい。

留学生のためのチューターも日本語の不十分な点を補強さえすればいいと考えがちであるが、生活のサポートとともに日本人的な考

え方や留学生との発想の違いを押し付けるのではなく、解説できる人が望ましい。留学生だけでなく日本人のチューターの側にとっても、チューターとしての活動自体が異文化接触そのもので、留学生とうまくやっていくために適応の段階論について考えておく必要があるように思われる。チューターとしての経験から、留学生にうまく説明できなかった日本語の問題を卒業研究のテーマにした日本人学生もいる。

留学生も日本のいいところも悪いところも、あるがまに見て、いいところだけを自分の中に取り込んでいけばいいというふうに割り切って考えられるようになる。この静観期の段階を経て間もなく次の適応期に至るのだが、しかし、まだこの段階ではどこか諦めきれぬものもあり、不満期の精神的なショックからまだ完全には立ち直り切っていない。いわば「途中半端な状態にあるといえる」(稲村1980:165)。つまり静観期(諦観期)は、不満期と適応期の狭間にある過渡期である。

大学のスタッフ側としては、教室内の学習だけでなく社会見学、野外研修、ホームステイなどの行事を企画し、学習者の参加をうながすようにしたい。そうすることにより、学習者がネガティブではなく、ポジティブな意味での静観期(諦観期)を体験することになる。スタッフ側も学習者が日本への過度な期待や固定観念を脱して、柔軟で融通の聞くもの見方ができるように指導してほしい。そのように心掛けると次の適応期への早期の移行が期待できる。

また、日本語学習者の面からは、ちょうど中級レベルあたりで日本語力の進歩がピタリと止まってしまうように感じられる時期がある。不満期の後期から静観期にかけて一種のスランプ状態に陥る場合がある。いくら勉強しても成績が上らず心理学でいうプラトー(練習の高原)にあたる。本国でみっちり日本語を学習してきたはずなのに、いざ留学し

てみると日本語教科書には載っていない若者言葉や短縮言葉、地域方言やら抜き言葉が周りに飛び交い訳がわからず、自信を失うことがある。また、研究生が日本留学試験で基準の点数が取れず、大学院の受験資格が得られない場合など、スランプ状態と感ずることもある。このようなプラトーンは「習熟の階級制説」からしても、次の段階への跳躍台と言えるから、気をとり直して課題に挑戦してみることを勧めたい。

留学生がこのような一種のスランプ状態に陥っているときには、無理に目の前の難問に取り組もうとせず、思い切って基本的なやさしいところを復習するなどして自信を回復するという方策をとるとよい。また、先輩として後輩に、わからないところを教えてみると優越感を持てたり、わかっていると思っていたことが本当は不確かであることがわかって、本人の弱点を発見する機会となる場合がある。そこから弱点を補強しようとする意欲につながることもある。

#### 1-4 適応期

文字通り適応状態に達した時期であり、無理なく日本での生活を楽しむことができる。日本の長所も短所もよくわきまえ、日本で生活し学習している自分自身の位置づけが客観的にでき、その場その場の状況に合った適切な対応が可能になる。

こうなると自分に与えられた条件下で日本での生活を十分にエンジョイできるようになる。毎日が楽しく充実しており、日本での学習目標がより明確になり、やり甲斐ができて、それに向って生き生きとした生活が送れる。たとえ、周囲の環境条件が客観的にはひどくても、本人はそれをものともせず、むしろそれをバネあるいは糧としていけるわけである。

日本で、その適応期にスムーズに達している留学生の比率はそれほど多くはないと思わ

れるが、とかくこの適応期に達している留学生のことがマスコミで報道され、口コミで伝わることが多い。そういった成功談は、尾鰭がついて実像より誇張されて伝播する傾向がある。実際にどの国に行っても、どの地域に行ってもまるで水を得た魚のように、活気あふれた生活を送っている留学生は必ずいるものである。

また、適応期は不適応期とは対照的に満定期と考えていいが、それは自己満足の状態というよりは、周りとの関係で摩擦を解決することができ、周りから支えられている状態が適応期本来の姿であろう。

この適応期は、必ずしもいいことづくめというわけではなく、日本社会に適応しすぎて「過剰適応」となってしまう場合もある。あまりにも日本社会に溶け込みすぎてしまうあまり、自国の文化を軽視したり、蔑視したり、日本人になりきろうと考えるようになるとアイデンティティー(identity：自己同一性)の面で問題が生じてくる。いわば「染まりすぎている自分」をある程度相対化してみる必要があるだろう。

#### 1-5 望郷期

最後の段階としては、望郷期が来る。いったん適応期に達したら、後はその状態がいつまでも続くかということ必ずしもそうではない。そのあとに、本国へのノスタルジアが強まり、それに支配される時期がくる。

もっとも、これは個人差が非常に大きく、程度が著しい場合もあれば、軽い人もいる。また、早くから出現する場合と遅い場合とがある。本人のおかれている状況や、本国との関係、家族関係、あるいは年齢などに大きく影響を受けると言われる。また、一年程度の滞在では、適応期のままこの望郷期に至らず、帰国する場合も多い。松村(2006)の調査でも、一年間の交換留学生の場合、適応期のまま帰国している例がほとんどであった。そう

いった場合には、むしろ本国に帰ってから、自国に適応できない逆不適応現象がみられるケースもある。

稲村（1980：168）は、次のように指摘している。「典型的なのは長期滞在者に見られるもので、それまでずっと適応してきたのが、ふとしたきっかけで強い望郷の念に駆られ、いてもたってもいられないようになる」。

就学生や留学生の場合、長期滞在と違っても在留資格と在留期限の関係で日本にいくら長く滞在したいと希望しても限度がある。

家族の不幸・病気などを表向きの理由にホームシックにかかった学生が学業を放棄し帰国してしまう例がある。望郷期が訪れ、どうにもならなくなり、「祖国の土を踏み、故郷の水を飲まない」とホームシックは治らない」と考えがちであるが、必ずしも学業を放棄して本国へ引き揚げてしまう必要はない。

短期間本国へ一時帰国するだけで、また余裕を持って適応期にもどり留学生生活を続けることができる場合もある。経済的理由から夏休み中も連日アルバイトしなければならず、一時帰国する余裕がないというような場合には、本国から家族か友人に日本に観光などで来てもらうという手もある。また、同国人同士、あるいは同郷人同士で集まって、郷土料理を食べながら母語で心ゆくまで話をするのもよい。

カウンセリングの分野では、ピア・サポート（peer support）、ピア・ヘルピング（peer helping）と言われる仲間うちでの支えあう人間関係づくりが効果を発揮すると言われていいる。ちなみにピアとは、同僚、仲間、友達などを意味する。留学生同士がピアの関係であるし、留学生とチューターもピアの関係である。（日本教育カウンセラー協会 2001、2002参照）

以上見てきたように、来日した留学生は、五つの時期を体験する。[入国期⇒不満期⇒静観期⇒適応期⇒望郷期]の順で推移するの

が一般的であるが、途中で条件が変わると経過が乱れ、逆もどりしたり、一足飛びに次の段階に進んだり、様々な変化を見せる。また「本人のおかれた状況や性格などによって、各時期の長さには個人差が非常に大きい」（稲村1980：173）。重要なのは、不満期をいかに短く軽くして静観期、適応期へと至らせるかである。そのために大学のスタッフ側も様々な工夫をしたり、予防的な対策を立てたりする必要はあるだろう。

以上、稲村（1980）が海外在留の日本人について論述した枠組が在日外国人留学生についても適用できるところを見てきたが、同氏も「同様のことは日本人のみならず、日本にいる外国人もそうだし、他の国にいる外国人についても同じようである」（p.173）と述べている。つまり、同氏の「人間の適応に関する法則性」は、留学生の場合にも適用できると言える。

文部省の指導で「日本語学校の標準的基準に関する調査研究協力者会議」が「日本語学校教育施設の運営に関する基準」を作成し、1982年12月23日付で発表した。その中に「日本語教育施設には、生活指導担当を置くものとする」という「生活指導」の項目がある。「生活指導」の内容としては、困難なアパート探し、賃貸契約の問題、大家との交渉、近所とのトラブル解決などだけではなく、入国期の不安、不満期の問題解決などカウンセリング領域の仕事が含まれていると思われる。特に入国期、不満期のカウンセリングは日本語ではなかなか難しいという現実問題がある。日本語を媒介言語として使用できない場合は、カウンセリング対象者の母語を用いるなどの方策をとる必要がある。留学生を対象とする生活指導担当者は、学生の母語話者でカウンセリングの訓練を受けた経験者が望ましい。不適応現象を起こしている留学生には、同国人のカウンセラーでない適切な相談相手になれない場合もある。

以上見てきた異文化適応の段階論の典型的なパターンをライフライン(人生曲線)の形式で表すと以下の図1のようになる。

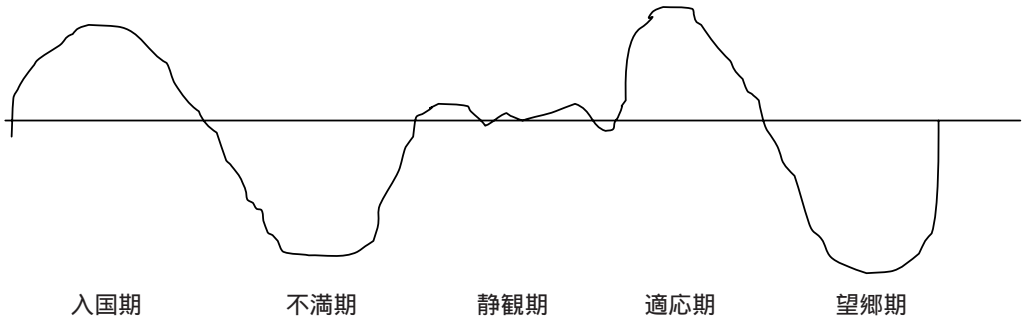


図1. 異文化適応パターンとライフライン(人生曲線)

## 2. 外国人留学生の日本への適応パターンと日本語教育の問題

心理学でいうプラトー (plateau または plateau phenomenon : 高原現象) が、不満期にあたるのか、静観期にあたるのかは、議論の分かれるところだろう。入国期、不満期と連続して学習効果があり、静観期でプラトーがくる場合もある。その場合には、不満そのものが学習のバネとなって、実力が伸びることもある。周りの日本人に言いたいことを言ってやろう、反論してやろうとする気持ちが、強く学習意欲を刺激するのである。いわば、負のモチベーションと言える要素がある。

不満期の程度が激しい場合、勉強が手につかなくなり、学習効果も停滞する。不満期の程度が軽いと容易に適応期に至るであろうが、適応期に入ってから伸びは飛躍的というほどではない。逆に、不満期の程度が激しい場合で、苦労して適応期に入った場合は、多に伸びが期待できる場合もある。

日本語の入門・初級レベルの段階では、周りの人々に気を配る余裕もなく、ただ用が足せばいいと考える時期で、コア (core) となるサバイバルな内容の日本語教育教材が必要であろう。買い物、挨拶、道を聞く、電話など基本的

な生活日本語を身につけなければならない。だからといって、野元菊雄氏 (元国立国語研究所所長) の提案した「簡約日本語」を教えるればいいということにはならない。人工的な簡約形を教えることは、後の適応期に入ったときの妨げになる。林 (1988) の主張するように、あくまで自然言語を目標に学習するようにしたい。それも自然習得に任せるのではなく、組織的計画的学習が望ましい。

第二期の中級レベルでは、周りの人々に気を配る余裕が出てくるので、もう少し突っ込んだ形で、問題解決の学習内容が求められる。また、前述したように日本事情学習のウェイトも増やしたい。

具体的には、日本テレビ文化事業団製作のビデオ教材『こんなとき日本語で』が多くの示唆を含んでいると思われる。教材作成の目的は、「主人公がなんらかのトラブルに巻き込まれ、それからいかに脱出するかを見ることを通じて、会話のストラテジー、技術を学ばせる」(1989.9.9「日本語教育を語り合う会」ハンドアウトより) こととされている。

内容は、場面別に「駅」「喫茶店」「コンビニエンスストア」「郵便局」などで構成されている。それも、同じ場面、同じ条件下で第一期の入門・初級レベルの段階に適した「そ



の1」と第二期の中級レベルに適した「その2」に分かれている点が画期的であると思われる。「その1」と「その2」の区別は、単なる語学レベル上での発展形というわけではなく、学習者が周囲の人々に対して配慮する心のゆとりがあるか否かで構成されている。

「その1」がトラブルに直面した主人公が、限られた言語知識、背景知識を使って、なんとか切り抜けるのに対して「その2」は、別の主人公（「その1」よりも上級者）が同じトラブルにあうが、より適切なやり方で解決する。（1989.9.9「日本語教育を語り合う会」）

第三期と第四期には、それぞれ適応期、望郷期が対応すると思われるが、日本語学習としては、上級以上の域に達しており、日本語教材としては、新聞、雑誌、文学作品、専門書、テレビ番組など生の材料（authentic materials）が使用できる段階である。

ビデオ教材としては、国際交流基金企画の『ヤンさんと日本の人々』（1983-1984）と『続ヤンさんと日本の人々』（1991）は、初級レベルの学習者を対象に製作されたものであるが、外国人の日本社会への適応という観点から見て興味深いものである。

また、『ヤンさんと日本の人々』は入国期の見るもの聞くものすべてが新鮮に感じられるヤンさんが描かれており（第1話～第13話）、『続ヤンさんと日本の人々』（第14話～第26話）の方は、不満期・適応期・望郷期を体験するヤンさんがストーリー性豊かに描かれている。特に後半の『続ヤンさんと日本の人々』で強調された点の一つとして「いいことばかりではない在日外国人の生活を無視しない（ヤンさんの病気、失恋、その「後遺症」）」ことが挙げられている。（日本語教育学会・研究例会・1989年9月2日ハンドアウトより）すでに20年以上前の古いビデオ教材であるが、2007年までは頒布されていた。いまは『DVDで学ぶ日本語・エリンが挑戦！にほんごできます』のシリーズの発行により『ヤ

ンさんと日本の人々』の頒布は中止された。しかし、いまなお海外では根強い人気がある。ドイツの大学でも授業で使われていて「毎回とてもおもしろくて、ドイツ人学生うけは最高によくて、日本語学の学生は皆、ヤンさんの恋が実るよにと心配していて、失恋したという時は、『ヤンさんどうなったか知ってる!?』と話題になっていました」とドイツに留学した日本人学生が報告している。

日本事情関係のビデオ教材としては、NHK インターナショナル・国際交流基金制作の『日本人のライフスタイル』（全20巻、1994）や東京書籍の『ビデオ講座日本語・日常生活に見る日本の文化』（全5巻、1992）がある。前者は英語版と日本語版があり、日本語を学ぶというより日本事情を学ぶ教材である。後者は、日本の生活習慣を学びながら、日本語表現の学習にもなるように作られている。また、ローカルには、石川県国際交流協会制作の『日本語ビデオ教材-石川で学ぶ-』がある。7つのモジュールに分かれており、それぞれの場面での依頼や断りなど機能（function）や聞き返しの方策（strategy）が盛り込まれている。さらに平成16年度学術振興会科学研究費補助事業として『ともに生きることばぐんま』（代表：庄司恵雄）が制作されている。7つの話題からなり、夜の日本語教室に通う国際結婚した嫁とその遅い帰りを叱る舅との確執などが問題提起されている。

### 3. 今後の課題

今後の日本語教材の開発には、単に語学的にやさしいものから難しいものへと配列するだけでなく、学習者の日本社会への適応段階に合わせた内容のものを作っていくという配慮が必要であろう。外国人のための日本語教材作成者および教育担当者としても、学習者の心理的な側面も十分考慮することが課題となるであろう。梶村・林（2008）は、山口県

で学ぶ学習者のための日本語テキスト『おいでませ山口』1～4の問題点の洗い出し作業を通して見えてきた課題を検討している。

従来の日本語教育がオーディオ・リンガル方式(Audio-Lingual Approach)に対する反省からコミュニカティブ・アプローチ(Communicative Approach)が研究されているが、前者が構造主義言語学に裏付けられているのに対し、後者は明確な座標軸がつかめないでいるのが現実ではないだろうか。ここでは日本語学習の新しい座標軸の一つとして本稿で見てきたような留学生の適応パターンの考慮を提案しておきたい。

二宮(1998)は、ベトナム人技術研修生の日本語研修期間における事例をもとに、入国期に見られる退行現象について述べている。このように適応段階ごとのきめ細かい観察をもとに今後さらに検討をすすめていく必要があるだろう。また、就学生と留学生の間での差異や技術研修生や国際結婚の配偶者など、おかれた条件や環境の違いによる適応状況の差異なども調査・検討していく必要があるだろう。

外国人留学生だけでなく日本人の児童・生徒の海外不適応の問題もある。梶村(2008)は、中国の蘇州日本人学校の中学生を対象に「心のライフライン」による異文化適応分析を実施している。河村(2005)の提唱している「心のライフライン」は、自分史をグラフのように人生曲線で表現するもので、個別のカウンセリングにも構成的グループ・エンカウンター(structured group encounter)など集団の活動にも用いることができる。今後、学習者の適応パターンと「心のライフライン」の関連をさらに調査し、検討している必要があるだろう。

(人文学部 教授)

【参考文献】

- 稲村博(1980)『日本人の海外不適応』日本放送出版協会
- 岩男寿美子・萩原滋(1988)『日本で学ぶ留学生・社会心理的分析』勁草書房
- 江副隆秀・林伸一編著(1986)『外国で日本語を教える』創拓社
- 河村茂雄(2005)『心のライフライン』精誠書房
- 木村直美(2008)「接客場面における日本語の語用論について—中国人、韓国人留学生のロールプレイによる談話分析—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第31号, pp.74-82
- 梶村知美(2008)「海外子女の『心のライフライン』による異文化適応分析—蘇州日本人学校中学3年生の事例—」山口大学人文学部言語文化学科日本語文化論コース林伸一研究室発行『エンカウンター研究』第1号, pp.159-165
- 梶村知美・林伸一(2008)「地域方言と日本語教育方言について—日本語テキスト『おいでませ山口』を検討材料に—」山口大学人文学部言語文化学科日本語文化論コース林伸一研究室発行『現代日本語文化論』第1号, pp.127-137
- 中根千枝(1972)『適応の条件・日本的連続の思考』講談社
- 日本教育カウンセラー協会編(2001)『ピアヘルパーハンドブック』図書文化
- 日本教育カウンセラー協会編(2002)『ピアヘルパーワークブック』図書文化
- 財団法人・アジア人口開発協会(1986)『在日留学生の学習と生活条件に関する研究』
- 二宮喜代子(1998)「入国期における退行現象について—ベトナム人技術研修生の日本語研修期間における事例をもとに—」全国語学教育学会日本語教育研究部会発行『JALT日本語教育論集』第3号, pp.40-51
- 林伸一(1989)「多様化する日本語学習者と教える側の課題」日本語教育学会発行『日本語教育』67号, pp.128-138
- 林伸一(1988)『『簡約日本語』批判』全国語学教育学会(JALT)発行『THE LANGUAGE TEACHER』1988年6月号, pp.31-35
- 林伸一(1990)「外国人学習者の日本社会への適応パターンと日本語教育の課題」日本語教育学会発行『日本語教育』70号, pp.49-59

松村佳奈（2006）「留学生の異文化適応パターンについて」山口大学人文学部言語文化学科日本語

文化論コース卒業論文（未刊行）  
森本哲郎（1978）『生きがいへの旅』角川文庫



萩美術館・浦上記念館の見学



韓国からの交換留学生とパン屋さんでの買い物